

● これから日本の図書館はどのような姿を見せていくのか ●

# 2050年の図書館 を探る 何が変わり・変わらないのか



野口 武悟・新藤 透・千 錫烈・長谷川 幸代 編著

A5・190頁 定価2,750円(本体2,500円+税10%)

ISBN978-4-8169-3041-6 2025年3月刊行

- 現在、大学で図書館情報学の研究と教育に携わっている教員らが、今から25年後の2050年の図書館を見据えて、各々の専門の見地から現状と課題、提言等を提言等をまとめた一冊です。
- 図書館の歴史やAI時代の情報サービスのあり方を論考。各編者が自らの研究に即し、地域資料、海外の動向、バリアフリー、災害・パンデミック、利用者の問題行動など重要度の高い問題に切りこんでいます。
- 司書だけではなく図書館に関心のある学生・市民にもおすすめ。

## 【編著者プロフィール】

### 野口 武悟

専修大学文学部教授・放送大学客員教授。『読書バリアフリーの世界—大活字本と電子書籍の普及と活用』（三和書籍 2023.7）など著書多数

### 新藤 透

國學院大學文学部教授。著書に『日本の図書館事始—日本における西洋図書館の受容』（三和書籍 2023）など

### 千 錫烈

関東学院大学社会学部教授。共著に『Web で学ぶ情報検索の演習と解説—情報サービス演習』（日外アソシエーツ 2023）など

### 長谷川 幸代

跡見学園女子大学文学部准教授。図書館利用の要因や、図書館の価値について、社会統計学の方法を利用し、データを用いた分析を行う

## 目次

- 第1章 座談会：過去から現在 25年間の変化・これから25年後の変化  
野口武悟, 新藤透, 千錫烈, 長谷川幸代, 細川博史, 青木竜馬
- 第2章 未来の図書館を考えるために、過去の図書館に学ぶ  
新藤透
- 第3章 地域資料を活かして創る地域と図書館の新たな関係  
野口武悟, 加藤重男
- 第4章 AI時代の情報サービス  
長谷川幸代
- 第5章 韓国の図書館制度～海外の図書館動向から考える日本の図書館の未来～  
千錫烈
- 第6章 「誰一人取り残さない」図書館の実現を目指して～共生社会の図書館  
野口武悟
- 第7章 公共図書館における利用者の問題行動・カスタマーハラスメントにどう対処するか  
千錫烈
- 第8章 災害・パンデミックに備える～これまでの災害に学ぶ  
新藤透, 千錫烈
- 第9章 これからの司書の専門性と司書養成  
長谷川幸代

\*「内容見本」は裏面をご覧ください。

202502

お問い合わせは… **日外アソシエーツ 営業局**

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845  
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <https://www.nichigai.co.jp/>

注 文 書	2050年の図書館を探る —何が変わり・変わらないのか	冊	取扱書店
	定価2,750円(本体2,500円+税10%) ISBN978-4-8169-3041-6		



9784816930416

# 『2050年の図書館を探る—何が変わり・変わらないのか』 内容見本

## 2.1 図書館の歴史を学ぶ理由

西暦 2050 年というと、本書が出版された時点の 2025 年からみるとちょうど 25 年後である。25 年後の図書館はどのように様変わりをしているのか、ちょっと想像がつかないという読者の方も多だろう。今から 25 年前、西暦 2000 年の時点から考えると、AI の導入や電子書籍の普及など想像もつかなかったと答える読者の方も多いと思う。未来がイメージできないというのも致し方ないことかもしれない。それほど 21 世紀に入ってから IT 技術が進歩し、今まで「常識」だと思われていた社会通念も覆されている。いろいろな意味で現代が転換点にさしかかっていることは間違いないだろう。

ではその転換点は人類始まって以来のことであるかといえば、そうではない。有史以来何度も人類は転換点を迎えて来た。そのたびに柔軟に対応し変化を遂げてきたのである。今回もその何回目にしかな過ぎない。なぜそのようなことが分かるのかといえば、歴史を学

んでいるからである。未来が不透明であり、それゆえ人びとは過去を学ぶことで、物事に対処してきた。未来を知ることができ、はるか前からの過去のことを考えるのは筆者が初めて唱えていること人達も指摘している。

古代中国の思想家孔子は、『論語』で「温故知新」を説き、過去の事実を研究し、そこから新しい知

「第2章 未来の図書館を考えるために、過去の図書館に学ぶ」より

## 6.1 はじめに

「本離れ」や「読書離れ」という言葉が聞かれるようになって久しい。しばしば、1 か月に 1 冊も本を読まない人の割合である「不読率」が引き合いに出される。図 1 は、全国学校図書館協議会が 2024 年 11 月に公表した過去 31 年分の子どもの「不読率」の推移である。子どもが「本を読まなくなった」とよく言われるが、図 1 から明らかかなように、小学生や中学生の「不読率」は 1990 年代に比べれば大きく改善傾向が見て取れる。一方で高校生のそれは 4～5 割台の高止まり傾向が続く。

文化庁でも、16 歳以上を対象とした「国語に関する世論調査」において定期的に「不読率」を調べている。2024 年 9 月に公表した令和 5 年度の結果によると、電子書籍を含めた「不読率」は 62.6% だった。つまり、「本離れ」や「読書離れ」は子どもよりも、高校生以上の年齢層のほうがはるかに深刻なのである。人口の大部分、別の言い方をすれば、読者であるべき人々の半分以上が「不読

「第6章 「誰一人取り残さない」図書館の実現を目指して～共生社会の図書館」より

過去31年分の不読者(0冊回答者)の推移

